



幻の「満洲国」建国神廟を復原する

Restoration of a Manchurian Shrine

津田 良樹 (神奈川大学工学部建築学科 助手 / 共同研究員) TSUDA Yoshiki



旧満洲国建国神廟は1940年に造営され、1945年に焼失した。わずか5年余の間、存在しただけの神廟である。その神廟は、ラストエンペラー満洲国皇帝溥儀が天照大神を祀るために帝宮内に建てた、日本における伊勢神宮あるいは宮中賢所に相当する満洲国宗廟である。

建国神廟の創建に至る経過、祭神問題、鎮座祭の様子、満洲国崩壊にともなって流転する御神鏡などについては嵯峨井建、島川雅史、外島瀏、八束清貫などの論稿から⁽¹⁾ある程度詳細を知ることができる。ところが、建国神廟の建物については、その実態が必ずしも明らかでない。そこで、本稿では建国神廟の建築がいかなるものであったかについて、残された資料を基に検討してみたい。

1 文献資料からみた建国神廟

『満洲建国十年史』⁽²⁾によると「神廟の御本殿は南面し、祭詞殿、神饌所、祭器所及び拝殿等がこれに附属してゐる。周囲は板塀を以て廻らされ、其の正面には白木神明造の鳥居が建設せられる豫定である。御建物は固より仮の御建築であつて、其の様式は白木、銅葺の権現造であり、用材はすべて満洲産の紅松が用ひられてゐる。」とある。

また、『建設年鑑 康徳十年版』⁽³⁾には「建国神廟御造営準備は康徳7年2月総務庁企画処が中心となつて事をすすめ、御造営は建築局之を奉仕し、2月9日帝宮内の浮域に地鎮祭を挙行、桧素木銅版葺流造本殿⁽⁴⁾ 祝祠殿、祭器庫、神饌所、拝殿の御造営に着手、3月30日御本殿立柱式を行い、5月28日竣工、7月15日皇帝陛下御臨の下に厳肅莊嚴に鎮座祭の御儀が行なわれて、まことに曠古の御盛儀であつた。」とある。

これら当時の資料や証言などをもとに戦後纏められた『満洲国史』⁽⁵⁾によると、神廟は建築局の施工で、1940年2月9日地鎮祭、3月20日に立柱式、5月28日に竣工、7月15日鎮座祭を執り行ったとされ、「社殿は銅板葺木造、南向き権現造りである。殿内は内陣、祭祀殿、拝殿と続き、内陣以外は石敷で、すべて立札式が採用された。社殿外

には神門があり、後には皇帝の命で神門外に木造の大鳥居が建てられた。社殿は日本の角南隆の設計に係る⁽⁶⁾とあり、これが通説とされている。

いずれにせよ、これらの資料を総合しても、社殿の様相は、塗装をしない素木の檜や紅松の本殿・幣殿(祝祠殿、祭器庫、神饌所)・拝殿からなる権現造で、銅版葺であり、内部は本殿を石敷の土足であったことが分かる程度であった。

2 ビジュアルに復原された建国神廟

昨夏、海外神社跡地調査の一環として、旧満洲国の「満鉄附属地神社」跡地調査⁽⁷⁾を行なった際に、旧仮帝宮(現、偽満皇宮博物院)庭園内に残存する建国神廟の礎石を略実測した。そのデータや『神社建築』⁽⁸⁾所収の「建国神廟平面機構」(略平面・略立面、但し寸法等は不明)⁽⁹⁾および2002年にNHKで放映された「ラストエンペラー最後の日」⁽¹⁰⁾で紹介された建国神廟の古写真。そのほか神門外から拝殿に向かって撮られた写真などを総動員して、建国神廟の実態にビジュアルに迫りたい。

略実測を行なった礎石は、かつて土に埋もれ、雑草が生い茂った状態であったが、2001年に発掘・整備されたものである。とはいえ、2006年8月現在、再び建物位置には灌木が繁茂し、礎石の全貌をみるのが難しい状況になっている。昨夏に行なった略実測図が図2である。『神社建築』所収の略平面(略実測した礎石図と比べてみると、略平面は必ずしも正確ではないようだ)や高さ関係を略立面から想定して、古写真を参考にしつつ各部を復原すると以下になるよう。

本殿は切妻造の妻入で、銅板葺の軒先を少し反らせている。正面間口10尺を柱間三間に分割し、中央間を5尺と広く取り観音開きの扉を建て込み、両脇間を2.5尺として板壁としていたようだ。背面は5尺二間の板壁であろう。両側面は6尺二間であり、前方の柱間は観音開きの扉が入っているようで、後方の柱間は板壁である。本殿は高床のようで、背面を除く三方に縁を廻らし、両背面脇に脇

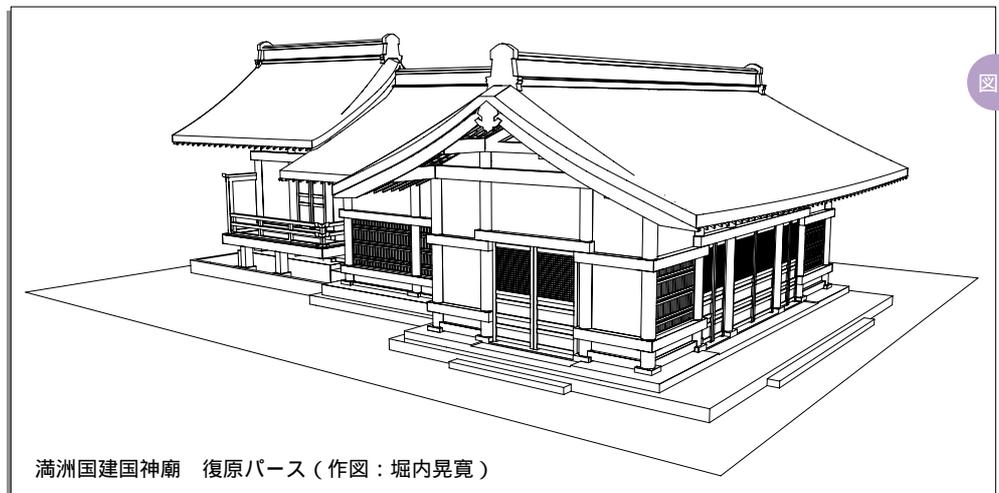
障子を立てる。正面には木階もあったようだ。

一方、拝殿は切妻造平入で、屋根は銅板葺の軒先を少し反らせる。正面間口を柱間五間に分割し、中央の三間に観音開きの扉を建て込み、両脇間は格子窓であった。両側面は柱間を三間に分割し、中央間に観音開きの扉、両脇間を板壁とする。

本殿・拝殿を結ぶ幣殿部分は両下造で、銅板葺。本殿に向かい幣殿右奥を祭器庫、左奥を神饌所にあて、残る部分を祝詞舎にしていたようだ。神饌所などがある側面には千本格子の窓が付けられている。また、拝殿および幣殿部分は土間で石を四半敷にしていたようである。

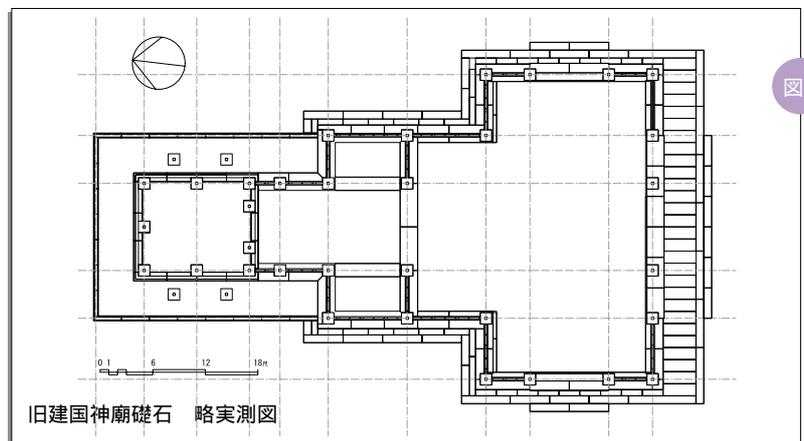
以上のように神廟を立体的に復原したものが図1である。本殿は、天照大神を祀っているにも関わらず、神明造ではない。日本国内では余り例を見ない切妻造妻入の本殿である。その本殿と切妻造平入拝殿とを両下造幣殿で繋いだ複合社殿で、主に檜材によって建てられている。古写真や復原図などをみる限り、中国的な意匠はほとんど見当たらない。寒冷地である満洲の地を考慮して、幣・拝殿を土足にした点を除けば、極めて日本的な建築様式で建てられていたといえよう。

当時溥儀は、天皇と同様な権威を得たいがため、自らの拠り所であった清朝の祖神を祀ることさえ放棄し、天皇家の祖神である天照大神を建国の神として祀り、日本の神道を国教とするなど、過剰なまでに天皇と同化しようとしていた。その溥儀が創建した神廟であれば、中国的な要素を混じえず、極めて日本的な建築様式で建てられたことは当然の帰結といえようか。



満洲国建国神廟 復原パース (作図：堀内晃寛)

図1



旧建国神廟礎石 略実測図

図2

- (1) 嵯峨井建「建国神廟と建国忠霊廟の創建」『神道宗教』156号、1994年9月。島川雅史「現人神と八紘一宇の思想 満洲国建国神廟」『史苑』43巻2号、1984年3月。『満洲帝国皇帝陛下御訪日と建国神廟御創建』日満中央協会、昭和16年1月。外島瀧『終戦秘話 満洲国祭祀府の最後 外山祭務処長手記』、昭和42年1月。八束清貴「満洲建国神廟仕末記」神社新報、昭和42年6月3日。など。
- (2) 満洲帝国政府、『満洲建国十年史』、原書房、昭和44年3月。
- (3) 『建設年鑑、康徳十年版』(満洲帝国協和会、1943年)所収の建築局第一工務處長、桑原英治「政府の営繕事業に就て」。
- (4) 『建設年鑑、康徳十年版』では、本殿を流造とするが、後述するようにこれは誤り、本殿は切妻造妻入である。
- (5) 満洲国史編纂刊行会、『満洲国史』総論、滿蒙同胞援護会、昭和45年6月。旧満洲国関係者を中心に資料と証言をもとに編纂された。
- (6) 『満洲国史』には、内務省神社局営繕課長であった角南隆の設計とある。しかし、前掲嵯峨井註1論文によると、実際には角南の命により谷重雄が全責任者となり、図面を引いたのは荻須左兵衛であったようだ。
- (7) 津田・中島三千男他「旧満洲国の『満鉄附属地神社』跡地調査からみた神社の様相」(『年報 人類文化研究のための非文字文化資料の体系化』第4号、2007年3月)。
- (8) 山内泰明『神社建築』神社新報社、昭和42年8月30日。序によると、山内氏がかつて内務省神社局にあって全国の多数の神社の造営や修理に携わり、戦後神宮司庁に移り営繕部長を務めた神社建築の権威。
- (9) 略平面をもとに、嵯峨井が前掲註1論文で平面を掲載しているが、内容は略平面とほとんど変わらない。
- (10) NHK、2002年1月8日放映[その時歴史が動いた『ラストエンペラー最後の日〜満洲国』と皇帝・溥儀〜]で紹介された写真。出典は未確認。